

「フラニーとゾーイー」を読んで

弁護士 住田 浩史



1. はじめに

「フラニーとゾーイー¹」は、J.D.サリンジャーの青春小説である。しかしながら、これは、単なる青春小説ではない。青春小説を最も純化するとこうなるという青春小説の原型ともいべき小説である。

2. ストーリー

ストーリーは、極めて単純である。第一部の「フラニー」では、俳優を志す大学生のフラニー・グラスが、周囲の学生たちが皆、知識をひけらかしているのにうんざりし、久々に会ったボーイフレンドにもうんざりする。しかしながら、同時に、何かを得て何者かになって称賛されたいという点は自分にもより強く当てはまることに気づき、そうすると自分にも吐気を催さざるをえない、という、割によくある自家撞着のために、卒倒する。

序巻は、第二部の「ゾーイー」であり、一日中ベッドでろくにももの食わずに衰弱し、汚れない世界、例えば全てを捨てて托鉢の旅で一生を過ごすキリスト者に憧れるフラニーに対し、兄でプロの俳優のゾーイーが、電話であれやこれや慰め、自分もお前も「太っちょのオバサマ」（これは後で詳しく触れる）のため演じなければいけないのだ、ということを書いて、ようやくフラニーは、安心して眠りにつく。

3. 「太っちょのオバサマ」とは誰か

さて、このように、ひとことでいえば、少女のいわば「中二病」の発病とそこからの回復を描いた話であり、まあ、よくある話である。しかし、この物語を名作たらしめている、最も独創的で、最も魅力的で、また最も謎めいている概念は、何より「太っちょのオバサマ²」である。太っちょのオバサマとは、想像上の人物で、太い脚で、ボロボロの藤椅子に腰かけ、一日中ラジオを聴いているような女性らしい。ゾーイーは、俳優として仕事をするにあたり、常に、この太っちょのオバサマを前にしていると仮定し、その人に見てもらうために演技をするのだという。

この太っちょのオバサマとは誰か。なぜ、ゾーイーは、そうするのか。また、フラニーは、なぜ、ゾーイーのそのひと言に、劇的に、救済されたのだろうか。

これには、いろいろな解釈があるが、私は、自分の思念、発言、行動のよしあしをはかる拠りどころを、自分の了解を超えたところに求めよ、自分の勝手な思い込みで他者や自分を理解した気になるな、ということであると考える。

すなわち、演劇好きの、目の肥えた「俗物」の観客、スノップな人間とは異なり、太っちょのオバサマはいつてみれば「超俗物」であり、俳優としてどういう演技をすればその「超俗物」の心に響くのか、皆目、わからない。常にそのような者から見られていると信じて演技をする。それこそが、俳優としての本分である。

これは、フラニーにとって、大いに救いとなる。フラニーは、周囲の人間を、知識を求めるエゴのかたまりだと見下している。しかし、それはそのまま自分に跳ね返ってくるので、自縄自縛で身動きがとれない。しかし、フラニーは、太っちょのオバサマをも、そのように見下せるのか。フラニーには、そのオバサマがいったい何を求めているか皆目わからないので、見下すことはできない。そうすると、太っちょのオバサマからは、何も跳ね返ってこない。そこで、はじめて、フラニーは、身動きができるようになるのである。

4. 他者、そして神の遍在

このあと、ゾーイーの話は、大胆に爆発的に加速する。まず、太っちょのオバサマがいると仮定せよ、という話から、一気に、太っちょのオバサマでない人は一人もいない、というふうに拡張するのである。これは、つまり、ある一面を見て全部をわかった気になってはいるが、他者には、みな自分が了解可能でない一面があるのだ、ということである。

そして、ゾーイーは、続けて、さらに驚くべきことをいう。まだ気づいていないのか、太っちょのオバサマとは、キリストその人なのだ。しかし、これについても、フラニー（と読者）は、さらに驚きながらも、ごく自然と受け入れる。了解不可能な他者の存在は、すなわち神の存在であり、それは、清らかで静謐な別世界などにあるのではなく、汚れた喧噪の中の俗世界にこそ立ち現れてくるのだ、ということである。うーん。すごい。

5. むすびに

この作品は、ものすごく端的に青春小説のエッセンスを抜き出し、そこから神の遍在までごく自然に描いてしまった、とんでもない小説である。理屈が勝っているとか抹香臭いという批判は、この作品のことを全然わかっていない証拠である。今更サリンジャーなんて、という人も、試しに、ぜひ読んでいただきたい³。また、思春期のお子さんがおられる人は、ぜひお子さんにすすめていただきたい（短いので、夏休みの読書感想文もすぐ書くことができる）。そして、太っちょのオバサマとは誰か、自分は太っちょのオバサマを相手にして生きているのかどうか、を考えていただければ、と思う。

1 2014年、村上春樹が「フラニーとゾーイー」というタイトルで新訳を出した。しかしながら、私は、べらんめえ口調の旧訳野崎孝版の「フラニーとゾーイー」に親しみを覚えているので、いまさら「ゾーイー」といわれても、誰ですかそれは、ということになる。よって、本稿は、「ゾーイー」で統一する。

2 村上訳は、「太ったおばさん」である。うーん。まあ、そうなんです。

3 余談ではあるが、村上の短編「イエスタデイ」中の、入浴中の友人と風呂の外の主人公が話をする場面、同じく長編「ノルウェイの森」ラストの、緑が主人公にどこから電話をかけているのか、と聞く場面等は、いずれも、この小説のある場面にヒントを得ているものと思われる（「刺窃」という趣旨ではない。念のため）。このように、サリンジャー、チャンドラー、ヴォネガット、アーヴィング等の米文学には、村上の小説と併せて読むと、新たな発見があり、けっこう楽しい。村上ファンにもおすすめする次第である。